

クリスマス：京・江戸・博多、そして巴里：11

南野， 森
九州大学大学院法学研究院：教授

<https://hdl.handle.net/2324/7170260>

出版情報：福音宣教. 76 (11), pp.10-11, 2022-12-01. オリエンス宗教研究所
バージョン：
権利関係：





1983年12月24日、京都・白梅町の
聖ヴィアートル会修道院聖堂



11 クリスマス

京都の聖ヴィアートル修道会が運営する洛星中・高等学校には、カトリック校ならではの様々な活動や企画があった。この連載の第1回でも触れた平日の「朝の祈り」もその一つだし、金曜朝には小聖堂でミサが捧げられていた。10月21日の聖ヴィアートルの祝日は学園の創立記念日となっていて、田中健一司教とヴィアートル会員たちによる荘厳な創立記念ミサが大講堂で捧げられていた。「死者の月」である11月には、卒業生や教職員など学園にゆかりのある故人の写真をやはり大講堂の舞台に飾って追悼ミサが捧げられる日もあった。

12月の思い出は、「クリスマス・タブロー」である。タブローとは、フランス語の tableau、絵画を意味する語。ここでは「活人画」のことで、舞台上で衣装を身につけた生徒たちが絵画のようにほぼ静止した状態で場面場面を演じ、それに聖歌隊や聖書朗読者、ハンドベル奏者たちがふさわしい「音」を加えることで、壮麗なキリスト降誕の絵巻物が繰り広げられる。中学1年生は合唱隊として全員が「動員」され、2年生以上は自由参加であつたように記憶している。中1から高3まで、役者、奏者、音響や舞台装置・会場設営等を担当する裏方など、総勢2百名ほどが一丸となつて準備を進めるこの企画は、人間関係もなかなか濃密で、毎年欠かさず参加している先輩や卒業後も通い続けるOBなどもあった。

「闇を歩む民は、大いなる光を見た」という聖書朗読者の堂々たる声は、いまだに耳に残っている気がする。イザヤ書の朗読から始まり、大天使ガブリエル、マリアとヨセフ、羊飼い、ヘロデ王、東方の3博士、といったいくつかの役の生徒

たちの静かな動きに合わせ、降誕の物語が進んで行く。出演者として参加しない大勢の生徒たちも、保護者や友人たちと鑑賞のために来校し、クリスマス・イブの大講堂は、毎年2千人くらいの観客で一杯になっていただろうか。

私はといえば、「朝の祈り」で聖歌を元気に歌う中1がいるということで、ラバディ神父やベルナルド修道士の目に留まり、なんと聖歌「独唱」者に抜擢されてしまっていた。まず受胎告知の場面、Ave Mariaをラテン語で、そしてマリアとヨセフの里帰りの場面で「夕闇迫る」を日本語で、オルガンとバイオリンの伴奏に合わせて大観衆の前で独唱。いまとなつては到底引き受けることなどできない大役であるが、子どもならではの怖いもの知らずというか、まったく物怖じすることもなく引き受けた13歳の私。ラバディ神父にラテン語を特訓してもらい、無事大役を果たすことができた（いまだにラテン語は覚えている）。

クリスマス・タブローが終わつたあと、夜9時から、修道院の聖堂で主の降誕の夜半のミサ。アラル神父の主司式、村田源次神父、ラトレー神父、ラバディ神父の共同司式であつた。そしてこのミサのなかで、私の「入門式」が行われた。アラル神父の判断で、ご降誕に入門式、枝の主日に洗礼志願式、そして復活徹夜祭に洗礼式という計画になっていたのであつた。後に、村田神父、そしてラバディ神父を継いで洛星の校長になられる、当時はまだ30歳前後であられたはずの数学の阿南孝也先生が代父となつてくださった。

こうして、私の信仰生活がいわば公式に始まつた。



みなみの・しげる●九州大学法学部教授。京都市生まれ。洛星中・高等学校、東京大学卒業後、同大学大学院、パリ第10大学大学院を経て、2002年九州大学助教授、14年教授。AKB48の内山奈月との共著で好評を博した『憲法主義』（PHP文庫）ほか著書多数。